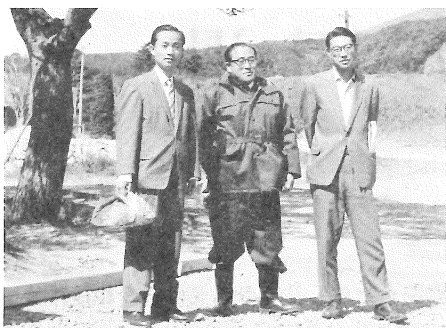




▲山崎和夫さん（左端）。昭和36年6月福島県二本松市にて。

# 山崎和夫さんと つまごい 孀恋農場

秋 元 喜 弘

病魔は、あるときには深く静かに潜入し、またあるときは急に襲いかかるものなのでしょう。山崎和夫さんが昨年暮れの12月30日に急逝されたとの報らせは私ばかりでなく、多くの方々にとってはたいへんな驚きであったのではないのでしょうか。

山崎さんは農林水産省で長い間いも類関係の行政に携わり、同省退職後は財団法人日本特産農作物種苗協会・財団法人いも類振興会の、それぞれ専務理事をつとめられ、いもにかかわる方々の多くは山崎さんに接し、思い出深いものがあるかと存じます。

「行政に明るく、しかも足が地についている」「話題が豊富、話術が巧みで人をひきつける魅力をもっている」「自己をかえりみず、心から他人のしあわせを考えて行動する」。私の山崎さんにいただくイメージはこのようなものでした。

第1の、行政に明るいのは本省に長年勤められたので当然といえば当然かもしれませんが、それが決して観念論・机上論でなく、農業の現場を熟知し、その状況を細かく分析して適切な考えを即座に次々と打ち出される、その頭の回転の早さと正鵠を射ていることに深く感銘したものでした。

第2の、話題が豊富で話術が巧みなことについては、あらためて述べる要はないと思いますが、山崎さんと話しをした方は思わずその話に引きこまれ、しばし夢で別の空間を旅しているような感にとらわれたことが多かったのではないのでしょうか。いつもたいへんに忙しく、難しい仕事をされていたのに、深刻な、あるいは怒ったような顔を見せたことは一度もなく、他人を楽しい世界に導いてくれたのは、やはり備わった人柄によるところが大きかったのでしょうか。

第3については、いもにかかわる仕事をしているとどうしても行政面で解決しなければならない事態に直面することが多く、結局は農林水産省のいも類担当の部署に相談し、その指導・助言を仰ぐこととなりますが、長くこの仕事を担当した山崎さんは事情に明るく、持前の気さくさでいつもテキパキと処理されていました。ときにはなかば私的なことなども相談に持ちこまれたようですが、決してイヤな顔をせず親切に対応しておられ、「山崎さん」「山崎さん」といつも慕われ、頼りにされていましたが、面倒をみてあげ、たいへんな苦勞をされても、そのことを口にするようなことはありませんでした。

このように山崎さんは長い間にも行政の第一人者として重要な任務を背負われ、幾多の業績を残されておりますので、多くの方々は山崎さんを「技術行政官」として見ておられたと思います。しかし、あまり知られていないかもしれませんが、山崎さんは一時期文字どおり泥にまみれて農業の実地を体験されております。

しばらく健康を害ねられ仕事を休んでおられた山崎さんは、病も癒えた昭和30年（1955）暮、群馬県吾妻郡孀恋村にあります農林省孀恋馬鈴薯原原種農場に着任し、爾後約3年間ここで勤められました。孀恋村は現在キャベツを主とする高原野菜の産地としてあまりにも有名ですが、当時は交通不便な高冷地で、ジャガイモ・キャベツ・ハクサイ・雑穀などの農産物、それに木炭を産する寒村で、文化果つところの感がないではありませんでしたが、冷涼な気候が種ジャガイモの生産に適しているため、戦後昭和22年（1947）に農林省がジャガイモ生産に必要な基本種いも（原原種）の供給基地としての原原種農場を設置したのでした。冬季やや厳しく冷えこむものの、空気は澄み水は清く、人間の生活環境そのものとしては健康地で、病後の山崎さんが勤められるには適していると判断しての異動であったと思われます。

ちょうど戦後10年を経過し、まだまだ貧しかったとはいえ日本は復興途上にあり、ようやく衣食の生活水準も向上のきざしが見えてきましたが、人里離れた孀恋農場ではこのような恩恵はなく戦中戦後の耐乏生活そのものでした。たとえば食糧をはじめ物資のほとんどは30km離れた長野県上田市に農場のトラックが所用で出かけた帰路積んできたものを皆

で分かち合い、サンマが入ったときには各家から焼く香りがただよい、たまに食パンがあるときには希望者の数に切りわけたりもしました。各戸に風呂はついておらず共同浴場で、しかも皆で枯枝を集めて燃料に供し、冬季暖をとるための薪は営林署より払下げを受けた場所で皆が休日に伐採し、また越冬野菜は各自栽培しましたが、土地がやせているためカラマツの落葉までかき集めて肥料とした、等々です。良いところといえば景色と水ぐらいだといわれた場所で、都会生活が長かった山崎さんにはどんなにかこの生活環境に慣れるのにご苦労があったことでしょうか。しかし、暮らしに対する不満など一切口にされず、かえってそれらを心の中で消化して明るい話題としてきりかえるので、山崎さんのいるところ常に笑いさざめく円陣ができるといった具合でした。

このように現在では考えられない貧困生活でしたが、皆が肩よせ合って助け合う姿勢をもっており、この都会ではなかなか見られない人間臭さと温かい情は、ただでさえ心豊かな山崎さんの人間性を一層高める働きをしたにちがいません。

生活面と同じく業務でも多くの苦労がありました。よい品質の原原種をいかに増産するかに当時の菅生数馬農場長（平成4年4月没）以下全職員が智慧をしばり力を出し合って取り組みました。農場の設置されたところは戦中は軍の演習場で、長年近在の農民が牛馬の飼料あるいは敷草とする草刈場としていたため、はなはだしく瘠薄で満足に作物が育たず、まず耕土の改善が急務とされました。そのため畑となっていない敷地内の草を刈って堆肥

原料にあてることはもちろん、稲ワラなどを購入し、牛を飼養して良質堆肥の生産につとめ、さらに種ジャガイモ栽培畑以外のほとんどに緑肥を作付してすき込むなどしました。私どもにとっていつまでも忘れられない思い出の一つとして、生産された堆肥を畑に運搬する仕事がありました。各畑はすべて堆肥場より高いところにあり、しかも運搬時期には道路がぬかるみとなってトラックの運行ができないため、冬季夜間道路が凍結したときを見計らって運んだもので、現在では思いもよらないことを当時のごく当り前のように思い成しとげたのです。このように営農条件が悪く、厳しい作業を行わざるを得なかったことも、病み上りの山崎さんにとっては大へん苛酷な環境であつたろう、と当時を思い出しても胸が痛みます。

ご本人はそのようなことは全く意に介さず、地下足袋<sup>たび</sup>をはいて急な坂を上り下りし、広い畑をあちこちと歩きまわり、夕方事務所にもどってきてはその日出会った事柄を面白く皆に披露するのです。山崎さんの話を聞いていると疲れも時間の経過も忘れて明日への意欲がもり上るとともに、仕事の上での得難い

助言を識らず識らずのうちに与えられたものでした。

私は農林水産省勤務三十数年のすべてを僻遠の地ですごし、とくに日本の高度成長後は都市部と農山村部の生活環境の格差がいちじるしく、ときには何でこのようなところでいつまでも働かなければならないのかと、内心おだやかならざることもなきにしもあらずでしたが、いま振り返ると美しい自然と温かい人情にかこまれたなかで人間らしく過せたことを、ほんとうにしあわせであったと感謝しています。山崎さんにとっても3年の短い間ではありましたが、そこで心身ともに得たものはおそらく都会での10年分くらいになるのではないのでしょうか。本省にもどられていも関係の仕事をされるときも、ともに汗を流したなつかしい1人1人の顔が、まのあたりにあられたたかもしれません。そしてそれが、山崎さんをして単に事務的でなく、ほんとうに血の通った温かい行政をされる源の一部となっていたのかもしれません。

謹んで山崎和夫様の御冥福をお祈り申し上げます。

~~~~~〔小説の中のジャガイモ〕~~~~~

『牛肉と馬鈴薯』 国木田独歩

牛肉を現実、馬鈴薯を理想として対比させている。

村上青年にとって学生時代から憧れていた北海道での夏のジャガイモづくりは、理想とした自由の新天地に近いものがあつたが、冬の厳しさは「北国の冬」という詩的なひびきとは遠く、寒くて寂しいものであつた。

理想や信仰を食べても満腹にはならない、肉欲否定のピューリタンから現実主義に、浪漫主義から自然主義へと変化していく著者の流れをしめす。

美辞麗句では腹がふくれないが、暖かい暖炉で食べる肉はエネルギーの源であるばかりでなく、人々をつなぐきずなにもなる、と言いたかったようだ。 〈浅間和夫〉

